

【講義3】写本について—奥書・識語を中心に

岡崎 真紀子

一、はじめに

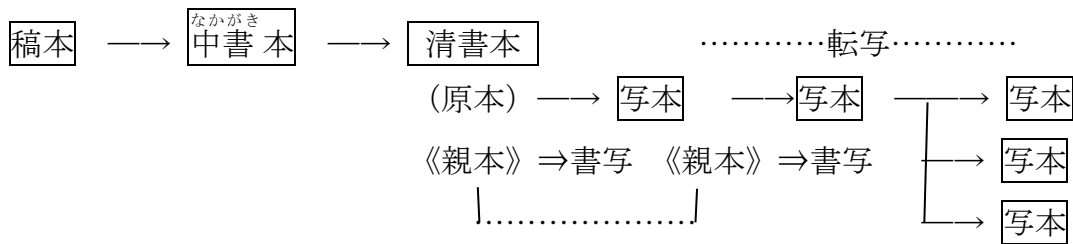
そもそも長い時を遡った頃に作成された古い書物が、今日まで失われることなく存在するのはなぜだろうか。それは、後世に残し伝えるべきものとして保持・保管する営みが受け継がれてきたからである。人間は書物に対して、書かれた内容はもちろんのこと、物（モノ）としての書物それ自体に価値をおくものらしい。ゆえに、本を作ることと読むことのみならず、本を所有すること、継承すること、そしてその本の伝来を書き留めることに特別な意義をおく意識も醸成されたのであった。

そこで本講では、日本の古典籍の写本をとりあげ、その歴史的展開を概観した後に、奥書・識語とはいかなるものかを考える。「奥書」「識語」とは、ある書物がどのように作られ、伝えられて来たかに関する情報を記した文・文章のことをいう書誌学用語である。用語については後述し、そのうえで、奥書・識語を読み解くことが、その書物の素性や伝来を知る重要な情報源となることを、具体例をあげながら示したい。

なお、写本および奥書・識語のあり方は、①仏典・仏教に関する書物、②漢籍・漢詩文に関する書物、③仮名および和語で書くことを旨とする書物 でそれぞれ異なるところがあるが、本講で具体例として主に取り上げるのは、③のうちの勅撰和歌集、とくに『古今和歌集』の写本である。

二、写本とは

古典籍は、写本（^{しゃほん}人の手で書き写された本）と版本（^{はんぽん}印刷された本）の2種類に大別される。「写本」とは、印刷された本（「版本」）と対応して、手書きした本のことをいう呼び方で、著者または編者が自分自身で書写した本（自筆本）も、写本と呼ぶ際の範疇に含まれる。写本をもとにさらに書写した本を転写本といい、書写の際に依拠したもとの本を親本（^{おや}）という。



成立の事情によって区別し、「稿本」(草稿本・手稿本・初稿本・再稿本など)、「草案本」、「中書本」(草稿と清書のあいだの中間段階の写本)、「清書本」「浄書本」などと呼ぶ場合もある。稿本は通常は著者が自筆で記したものだが、中書本や清書本は、他者に書写させて作成される場合もある。

三、日本における写本と版本——歴史的展開

日本で作成されたもので、最も早い時期に書写された書物は何か。聖徳太子(574～622)の著述とされる『法華経義疏』四卷(御物)は、太子が自ら書き記したものと伝えられている。その伝承が正しければ、現存最古の書物ということになるが、書写の事情を伝える年時などが記されておらず、書写年代については研究者の間でも統一的な見解が示されていない。

現存する書物で、書写の年時を記した最も古いものは、『金剛場陀羅尼経』(国宝、文化庁保管)である。卷一末尾に、書写された年月や場所、人物が記されており、「歳次丙戌年五月」に「川内国」(河内国)で「宝林」という名の僧が書写したと知られる。

「丙戌」の干支は朱鳥元年(686)に該当すると見るのが定説とされる(※注)。

このように書写活動の初発的なものは、仏教の伝来と興隆に伴って行われた仏典の書写(写経)であるが、7世紀には、律令制の整備とともに、国史編纂事業のためにさまざまな資料が集められ、それを管理し書写する図書寮が置かれた。10世紀に入ると仮名(ひらがな)による日本語表現が確立し、連綿体(文字と文字を連続して書写する表記形態)を発展させる。表記方法の確立は、中国とは異なる独自の写本の様式を生み出した。漢籍あるいは漢字表記のもの、カタカナ表記のものは、学問的・実用的性格が強いが、ひらがな表記を用いた和歌・和文を記す写本のなかには、装飾性の高い料紙や装訂のものも見出され、美術品・調度品とする意識をもって作成されたものもある。

*

はやくから印刷によって書物が制作された中国やヨーロッパと異なり、日本では写本には版本とは異なる価値が認められて長く制作された。近世以前に出版された版本は仏典を中心としたもので、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、奈良や高野山で春日版や高野版の經典章疏が印刷された。鎌倉時代から室町時代にかけては五山版が行われて出版されるジャンルは増加したが、流通する書物の多くは写本であった。広い分野で版本が制作されるようになるのは、17世紀以降に商業出版が広く行われるようになってからのことであるが、江戸時代を通して写本も多く制作され、享受され続けた。

写本と版本が並存したことの理由として、以下のようなものが考えられている（堀川貴司『書誌学入門－古典籍を見る・知る・読む』勉誠出版，2010年）。

- ①写本を版本より上位に見る意識があった
- ②著名人あるいは公家・書家などの筆蹟を尊重する意識があった
- ③写本でないと流通できないテキストがあった（将軍・大名のことを書いた軍記物・実録などは出版が制限されていた）
- ④一般への流布を嫌うテキストがあった（講義録，芸道の秘伝書など）
- ⑤多くの人が自分自身で書物の制作をおこなった

量的に見れば、現存する写本の多くは江戸時代に作成されたものである。写本が書物の中で重要な位置を占めるのは明治期をもって終わる。

四、写本の種類

A、書写活動・転写の方法

転写の方法による区別をとくに示す場合に、下記の言葉を添えて説明することもある。

①透写（透き写し・影写）

薄様（薄手の斐紙）あるいは薄手の楮紙を親本の上に置き、筆でなぞり書きして転写したもの。字の大小や連綿なども忠実に再現される。忠実な再現を目的とした書写を「模写」，「臨模」と呼ぶ。 e.g. 透写本、模写本、臨模本

②謄写（見取り写し・見取り書き・臨写）

紙面の忠実な再現は意図せずに転写すること。親本を横に置き書写する。写式（行数・字数・字高など）は親本と同じにすることも多い。 e.g. 謄写本、臨写本

③校合^{きょうごう}

本文^{ほんもん}の異同を、他の伝本と照らし合わせて、訂正したり異同を書き記したりすること。親本を転写した後に、それと相違ないか確かめることや、他の伝本を入手して差異を示したりすることをいう。「校」は比べる・調べるの意。

B、転写本の制作年代による呼称

室町時代以前の写本を古写本、江戸時代以後の写本を近写本、明治時代以後の写本を新写本と呼ぶ場合もある。

C、書写者を特記する呼称

天皇が書写した本を「宸翰本」(宸筆本^{しんかん しんぴつ})、親王・皇親の書写した本を「御筆本」などと呼ぶ場合もある。

五、写本に準ずる資料

一般的な写本とは区別されるが、写本に準じて考えるべき資料もある。

①古筆切^{こひつぎれ}

能書家や歴史的人物の筆跡を賞翫するために、写本から一部を切り取ったもの。書物としての形態を留めないが、元来は写本の一部であった。現在伝わらない作品の本文を伝える資料となり得るものもある。掛軸、手鑑^{てかがみ}、断簡（マクリ）の形で伝わる。

②懷紙・短冊^{かいし たんざく}

和歌・連歌・俳諧などを詠む際に記す料紙。原則として作者自身が書き記したもので筆跡資料としての資料的価値も高いが、転写や贋作も少なからず伝わる。

③版本への書き入れ

版本への書き入れは独立した本文ではないが、版本の本文と補完的に本文を形成している。他本との校合や注釈を書き入れる例が多い。

④模刻本^{もこく}

江戸時代には、能書家・著名人の墨蹟を慕いそれを写して版下とした模刻本が制作された。また、稀本の紙面そのままを版本におこすことも行われた。模刻本は、版本ではあるがその複製と言え、元の本が失われている場合には、それに代わるものとして資料的価値は高い。

六、奥書と識語

「奥書」と「識語」という書誌学用語について、『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店）の項目から抜き出して引用すれば次の通りである。

奥書 おくがき

- ・書物の最後、または本文の末に記された文章
- ・著作・書写・校合・相伝・伝受・伝来などについて記するのが普通で、漢文体のものが多く、和文のものもある
- ・奥書によってその書物に関する情報、とりわけ本文の性質や伝来を知り得るのが普通

（井上宗雄項目執筆）

識語 しきご

- ・巻末に記載されたものが多いが、見返しや遊び紙など、巻中の余白のどの部分にでも記載されることもある
- ・ある書籍についてのさまざまな情報を、その書籍に書き加えた文字・文章をいう奥書と区別がつきにくい場合もあり、専門家の間でもいまだに定説をみないが、記載者がその書籍の著者や書写者ではなく、所蔵者や読者など後人（旧蔵者や伝承者に仮託することもある）であるときに識語と言ひ、奥書と区別されている

（紙宏行項目執筆）

注意されるのは、「奥書」と「識語」の「区別がつきにくい場合もあ」と記されている点である。たしかにこの用語には混乱を生じさせやすいところがあり、解題や解説等における用語の使い方に揺れが見られる場合もあるようだが、原則として次のように考えておけばよいと思われる。

奥書……著作・書写・校合・相伝・伝受・伝来など書物の成立に関わる情報

識語……所蔵者・伝承者・読者などの後人が記した書物の伝来に関わる情報

たとえば、前述した『金剛場陀羅尼經』巻一末尾の記述は、書写の年時や書写した場所や人物といった、書物の成立に関わる情報を記した奥書である。

また、国文研蔵『古今和歌集』（12-20）には、本文と正和元年の「日朗」という奥書があり、一丁半を隔てて、後人の筆で、この本は江戸時代の元禄元年に父が御家老様より拝領したものである、との旨が記されている（図版^[5]）。こうした記載は、所蔵者

などの後人が記した書物の伝来に関わる情報であるから、識語と言っておけばよいだろう。

ただし、用語を厳密に定義しようとする課題がでてくる場合もあるかもしれない。実際の古典籍を調査・記録する際に、判断や説明に困るような特殊な事例に遭遇した場合には、その本の状態を具体的かつ丁寧に記述しておく必要がある。

奥書・識語には、どのような素性の本を、どのような理由で、いつ、誰が書写したのか、その本がどのように伝来したのか、といった情報が記される。年紀や署名を伴うものが多く、書写年代と制作事情（書写者・場所・制作目的・校合の状態など）、および伝写の系統や伝来の過程を知る重要な手がかりとなる。

七、本奥書・書写奥書 そのほか

A、本奥書と書写奥書

奥書は、「本奥書」と「書写奥書」に区別される。

本奥書は、親本にあった奥書をそのまま転記したもので、「本云」、「本奥云」などと注記して示す場合もある。「本云」（ほんにいわく）とは、本の奥書にはこのように記されていたの意で、ある書物を書写した際の、もとにした本（親本やその祖本）にあった奥書、またはそれを写した奥書であることを示したものである。

また、奥書の署名の後に「判」、「在判」とあれば、親本の奥書に花押（符号風に形様化した自署サイン）があった旨を書写者が注記したものであるから、この奥書は本奥書であると判断できる。ただし、「本云」「本奥云」「判」「在判」といった注記をしらず、親本にあった奥書を書写者がそのまま写すことも少なくない。

書写者が当該の書物を書写した際に記した奥書を「書写奥書」と呼ぶ。書写者自身の花押が添えられる例もあるが、本奥書にあった花押まで書写者が写し取って記すこともある。このような場合には、本奥書か書写奥書かを、墨色・書風・紙質・装訂などから総合的に判断する必要がある。

B、奥書の諸相

書写奥書に署名が添えられていても、本文は一部分のみを書写者自身が記して後を祐筆（文筆に長じたもの、またその職務）や近親者などに書写させる例や、本文全体を祐筆や近親者などに書写させて奥書の署名のみを添える例もある。

校合した旨を記す奥書を「校合奥書」、書物の伝領やその内容の伝授、書写者の認定などを証した奥書を「加証奥書」などと呼ぶ場合もある。

C、識語の諸相

識語には、記される位置や様態においてさまざまなものがある。巻末や、本文の中間の余白のほか、表紙に簡略に記されるものもある。

書物の伝領を記す書き付けを「伝領識語」と呼ぶ場合もある。

D、書物に附属するもの等に記される情報

書物そのものに記された情報ではないが、書物を収める箱に伝領が記される例もある（箱書き）。古筆家（こひつけ古筆鑑定を専業とする家）等によって付された極札や添状（きわめふだ折紙）を附属する場合は、それらに伝領の情報が記される場合もある（図版[6]、図版[2]）。

八、奥書の継承、転記、そして偽奥書

書写の際に、親本にあった奥書を書写者がそのまま写し、本文とともに奥書も継承されてゆく場合が少なくない（むしろ一般的である）ことは前述した。それは、その書物をいつ・誰が書写した、誰から誰に伝受した、などといった奥書に記されることがらを、書き留めて伝えるべきものであるとして重んじる意識があったからであろう。

奥書のなかには、書写のもとになった親本にはなく、他の伝本に記されている奥書を、書写者が転記して書きつけたと思われる場合もままある。そうした場合は、奥書の情報と書物自体の来歴との比較、書誌学的知見、本文上の検討などを通じて、奥書の記述の整合性が判明することもある。このような奥書は、いささか書写者の意図が加わった営みと言えようが、必ずしも偽装する故意があったとはかぎらない。むしろ、しかるべき成立や伝来を有する本であると奥書に記されていることが、その書物の価値と権威を示すという意識があったことをものがたる。

さらには、事実として確かめられない成立事情や伝来過程を書き記した奥書も存在する。こうなると、その書物を享受した者が、架空の成立事情や伝来を捏造して書きつけた「偽」作の奥書ということになるだろう。そのような場合は、書誌学的・文献学的な考証によって、奥書の記述と事実との矛盾を明らかにする。ただ、単に現代の観点での真偽という尺度で見れば「偽」と思われる営みでも、なぜそのような奥書を人が書きつけたのかという観点で捉えたと、そこには、そもそも奥書とは何のために

記されるのかという本質的な問題を考える端緒があるように思われる。

九、書写年代の判定

奥書・識語に記される情報が書物そのものの成立事情を伝えているか否かは、総合的な判断が必要とされる（紙質・書風・装訂・装飾の状態などを併せて考える必要がある）。

江戸時代の古筆家による極札は、記される人物の真筆であるかは疑わしい場合がほとんどであるが、おおよそその人物の生きた年代の書写である場合も少なくはなく、書写年代を考える際の一定の目安となる。

参考文献

- 1 国文学研究資料館編『本 かたちと文化 古典籍・近代文献の見方・楽しみ方』（勉誠社、2024 年）
- 2 佐々木孝浩『日本古典籍書誌学論』（笠間書院、2016 年）
- 3 国文学研究資料館編『古典籍研究ガイド 王朝文学をよむために』（笠間書院、2012 年）
- 4 堀川貴司『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、2010 年）
- 5 中野三敏『和本の海へ 豊饒の江戸文化』（角川書店（角川選書）、2009 年）
- 6 橋本不美男『原典をめざして 古典文学のための書誌』（笠間書院、2008 年初版 1974 年）
- 7 櫛笥節男『宮内庁書陵部 書庫渉獵—書写と装訂—』（おうふう、2006 年）
- 8 山本信吉『古典籍が語る—書物の文化史—』（八木書店、2004 年）
- 9 井上宗雄等編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、1999 年）
- 10 藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書院、1991 年）
- 11 国文学研究資料館編『初雁文庫主要書目解題 付初雁文庫目録』（明治書院、1981 年）
- 12 同館参考室編『国文学研究資料館特別展示図録 五一館蔵貴重書展』（1981 年）

<https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/record/3964/files/EXB7005.pdf>

（※注）『金剛場陀羅尼經』の成立年代については、朱鳥元年（686）ではなく、天平十八年（746）の書写ではないかとする見解も出されたが（藤本孝一）、従来の説を支持する反論が示されている（赤尾栄慶）。『日本古写經研究所研究紀要』2018 年 3 月、2022 年 3 月。参考文献 1 の注(1)87 頁参照。

〔図版〕 写本に記されたさまざまな奥書・識語

1 『古今和歌集』(99-2) ^{れいぜいためかず} 冷泉為和 (1486-1549) 筆 2 帖

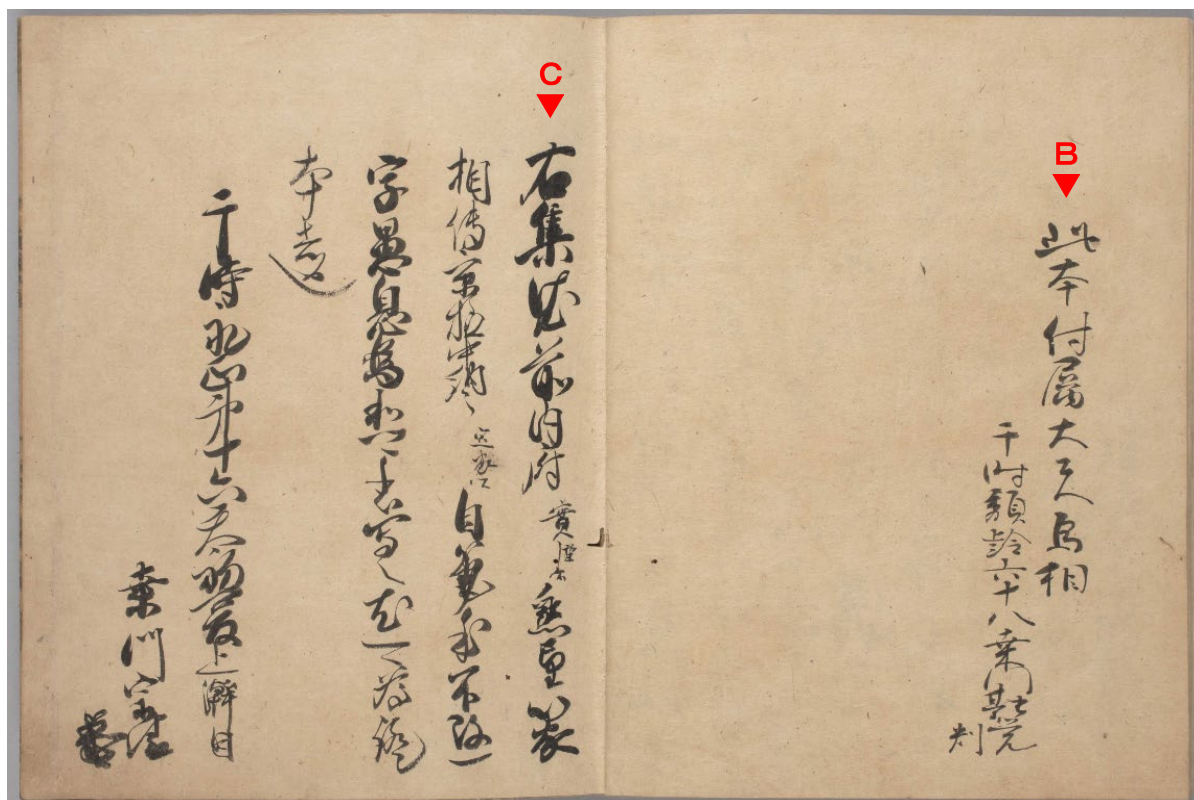
[illegible]

深養文よりいふまじむるむ下
 道はみもゆむ位をの序はなす
 ちかき

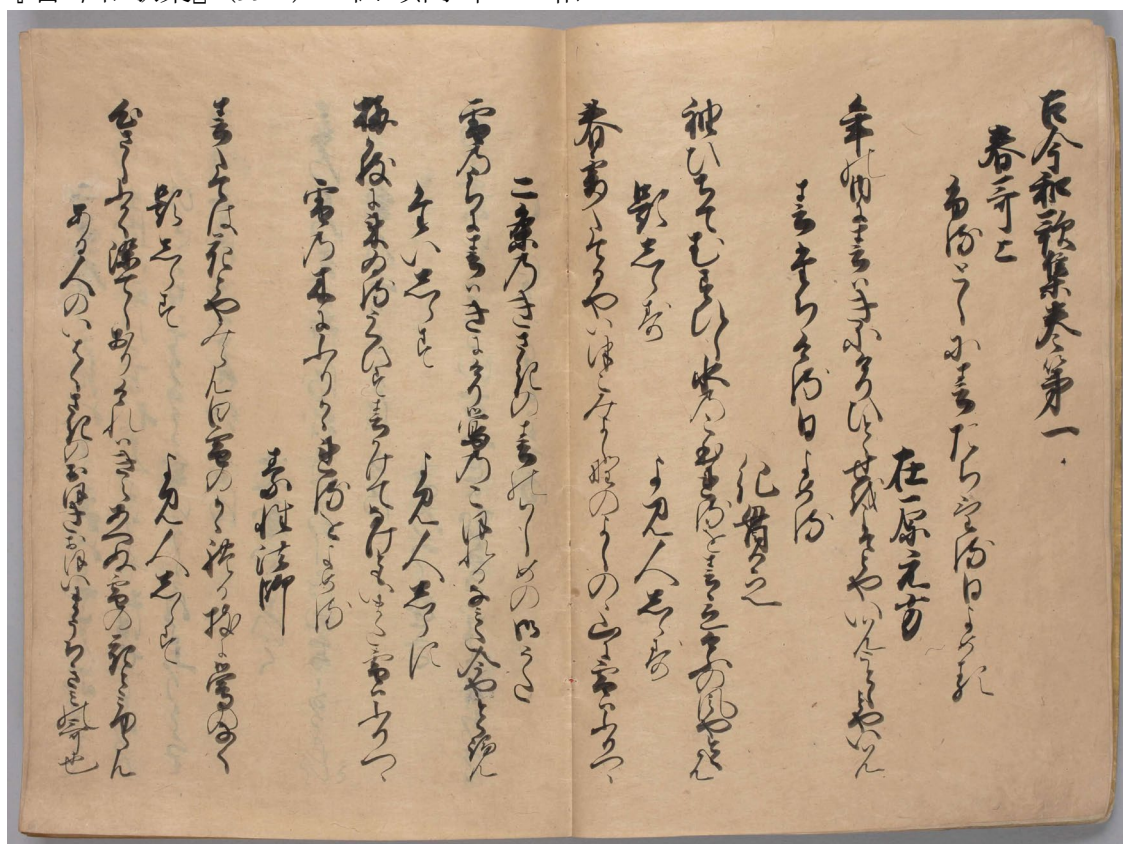
A

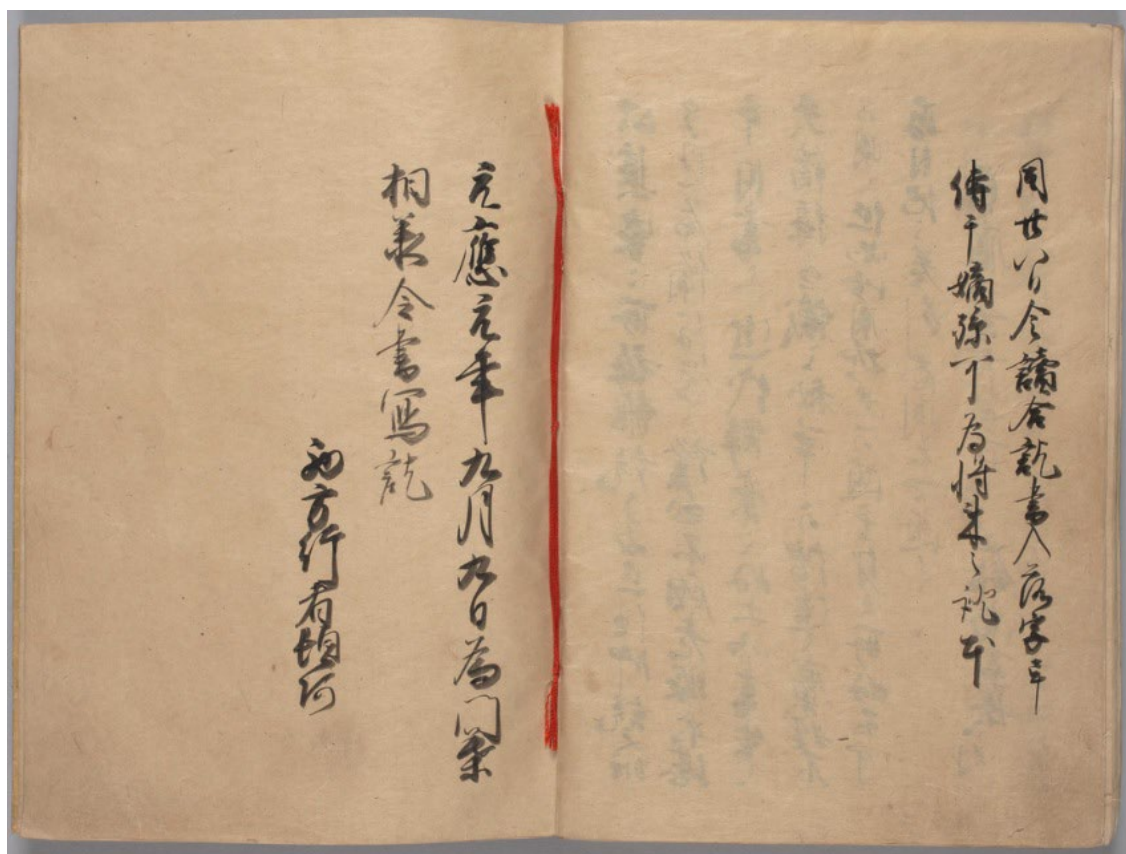
此集家六編雖説多且任師説
 又不可見為偏後學之流本手自
 書之五代僻書少中書世之失錯
 轉有識之秘事可謂道之魔世不可用
 但如世用捨此可隨天身之所好不
 可存自他之差別志同者可用之

嘉祿二年閏九月日戸部尚書判
 于時類齡六十五寧堪右筆

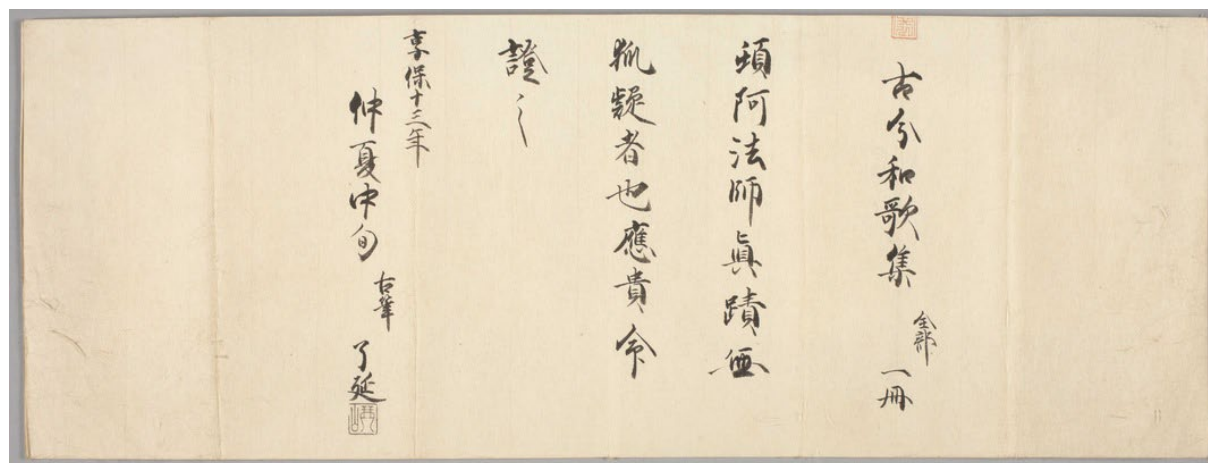


2 『古今和歌集』 (99-4) 伝頓阿筆 1 帖



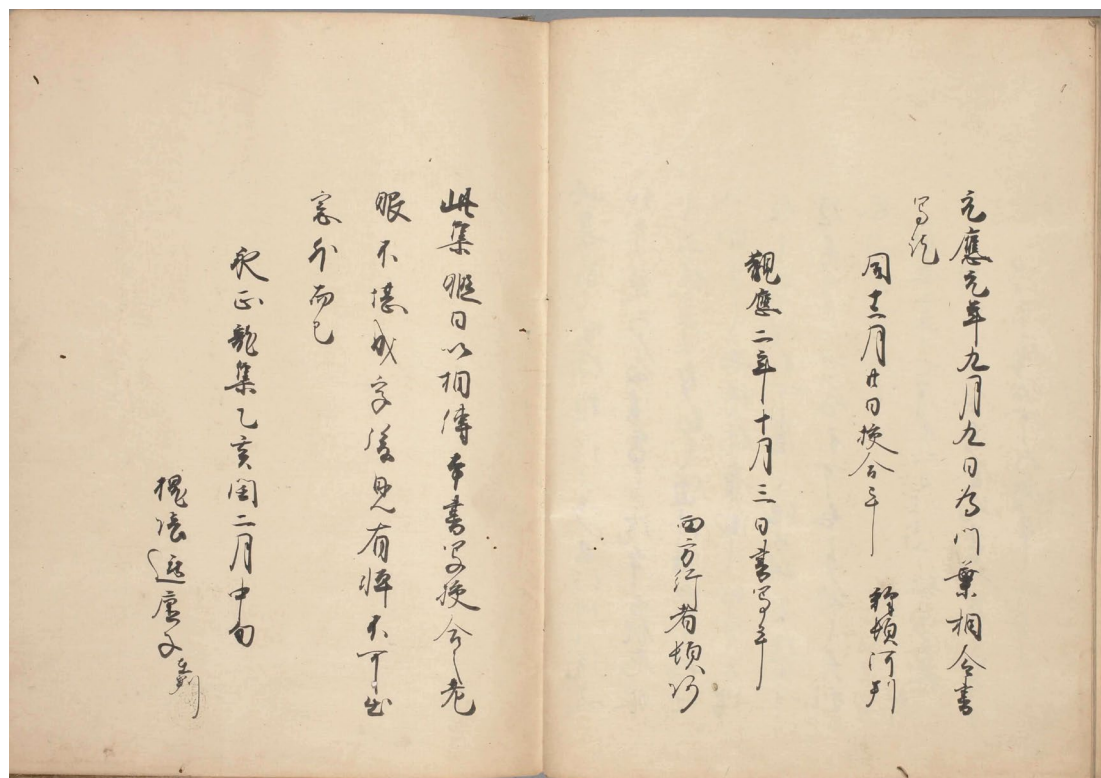


『古今和歌集』(99-4)の添状(折紙)

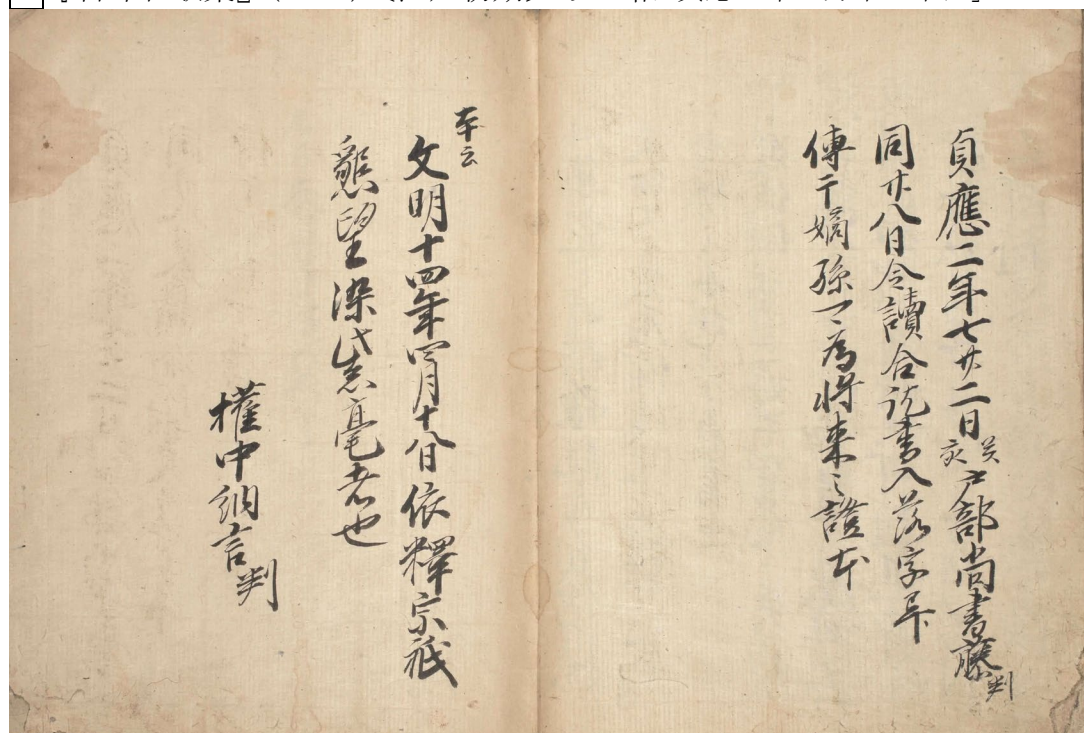


3 『古今和歌集』(12-16)〔江戸初期〕写 2 帖

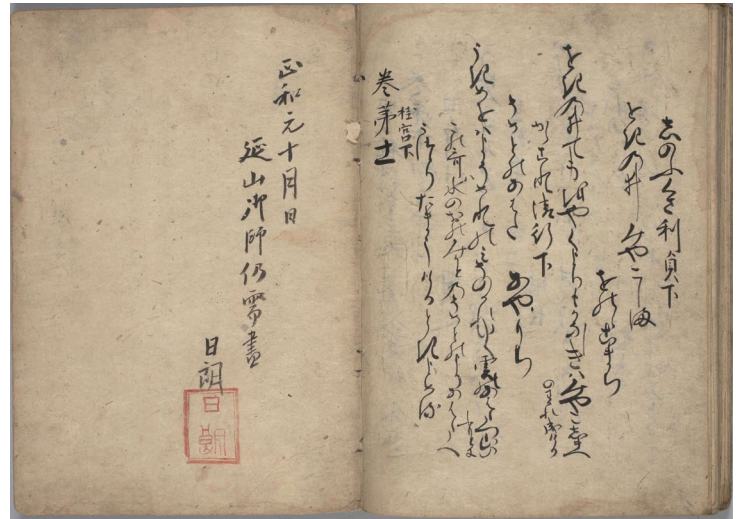
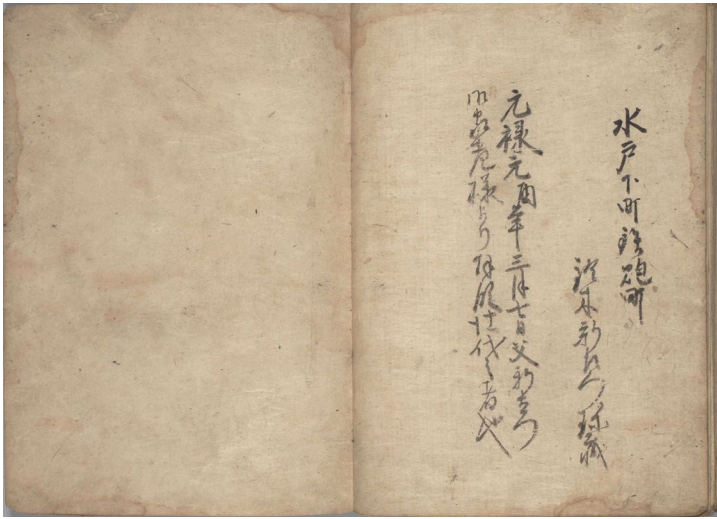
貞応二年七月本 頼阿本奥書 永正十二年三条西実隆奥書



4 『古今和歌集』(12-18)〔江戸初期〕写 2 帖 貞応二年七月本「本云」



5 『古今和歌集』(12-20) 写1帖

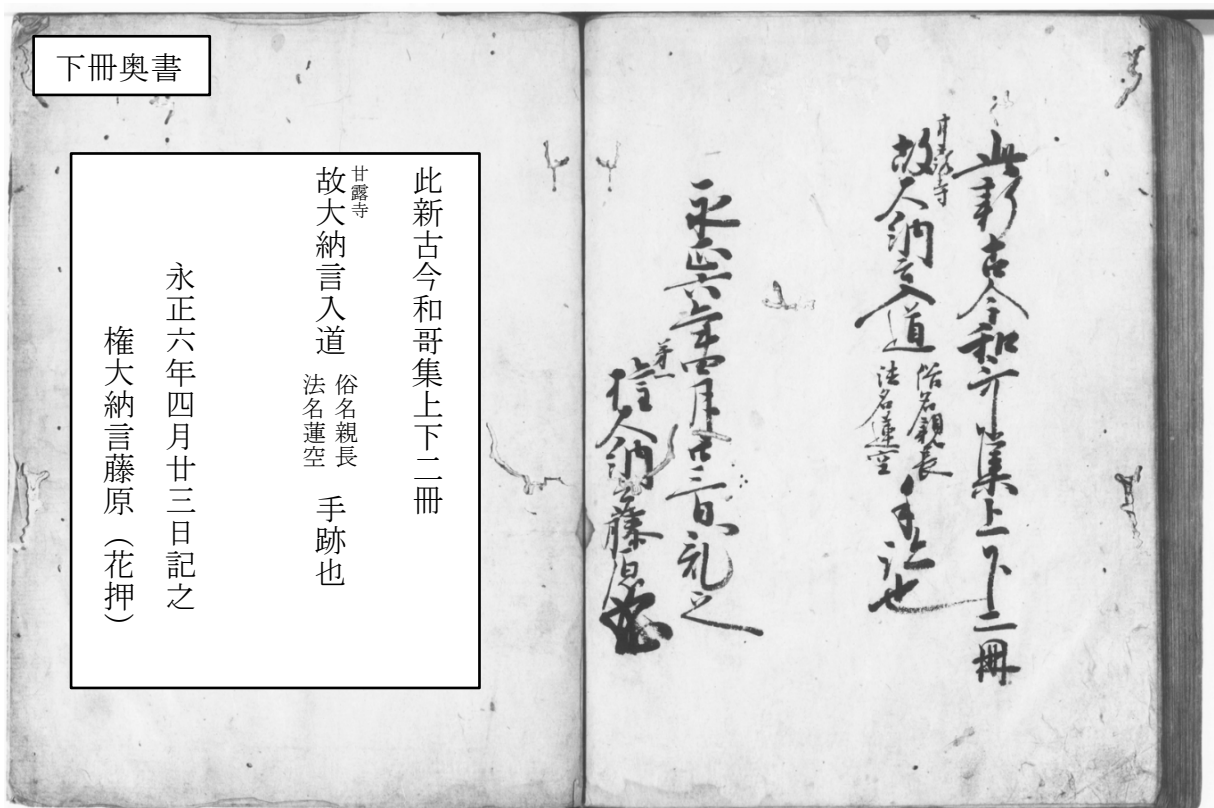
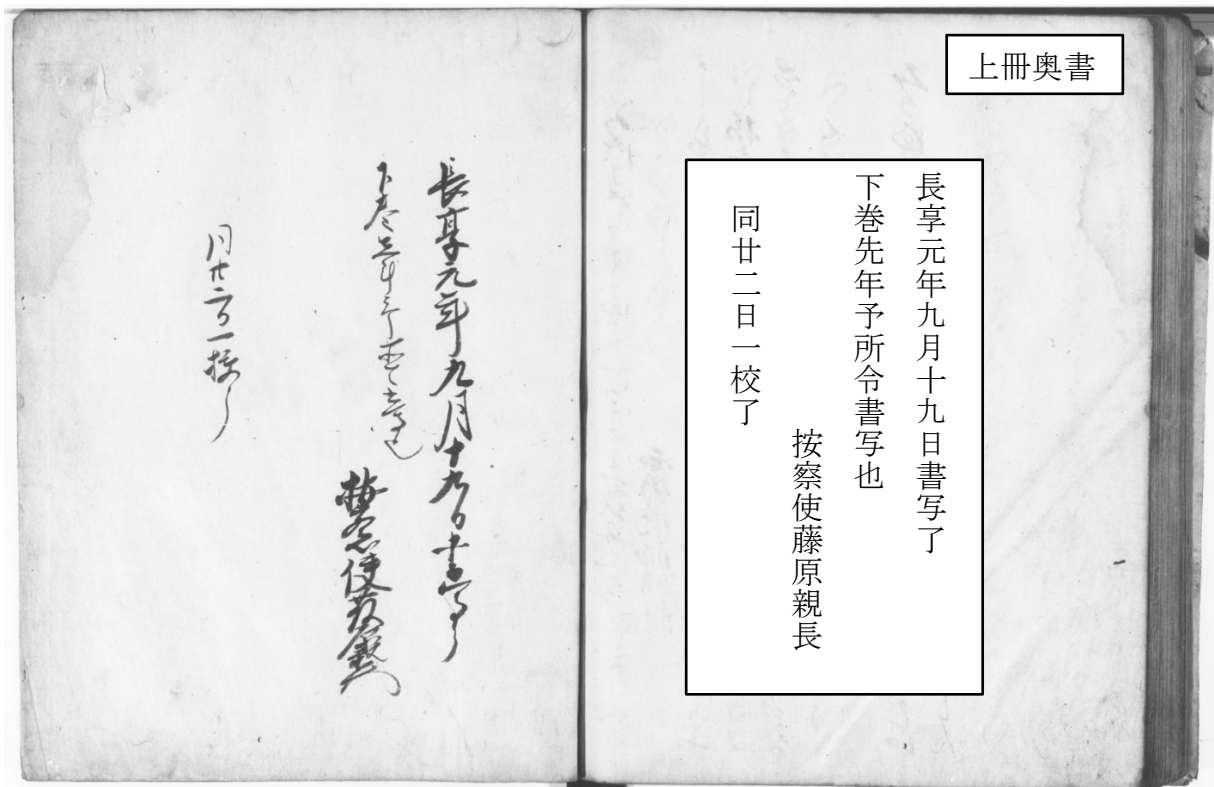


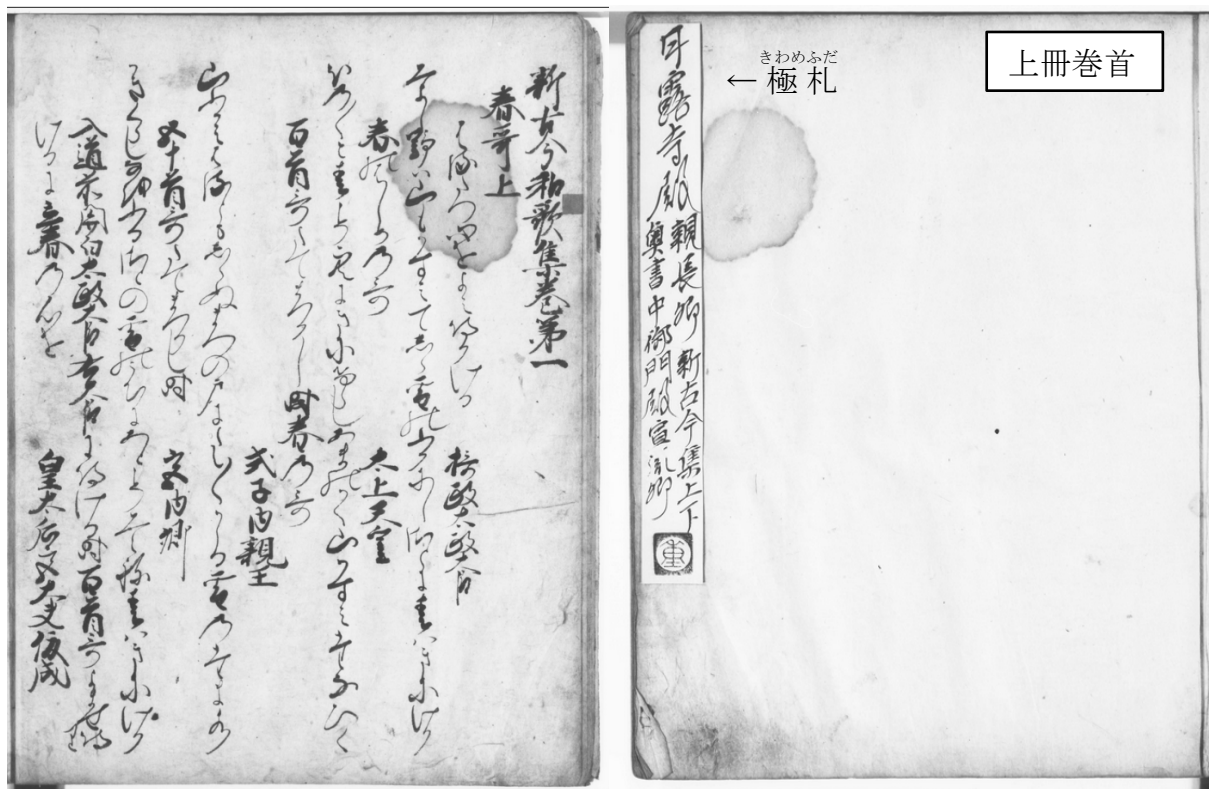
- ・ 國學院大学図書館に南北朝期写本（貴 3008。伝頼阿・兼空写。延文四年の頼阿識語と兼空署名を巻尾に付す）が所蔵される。

<https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/diglib/kkw3008/mag1/pages/page001.html>

- ・ 『尊経閣叢刊 宝積経要品』（育徳財団、1929 年）、財団法人前田育徳会『国宝 宝積経要品—高野山金剛三昧院奉納和歌短冊』（勉誠出版、2011 年）に書影の収められる短冊が頼阿の筆跡として確実な遺品。
- ・ 浅田徹「古今集奥書集成から見えるもの」（『調査研究報告』30、2010 年 3 月）
<http://doi.org/10.24619/00001438>
- ・ 浅田徹・山本まり子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（一）」（『調査研究報告』20、1999 年 3 月）、浅田徹・岡崎真紀子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（二）—付：西下経一の古今集伝本研究について」（『調査研究報告』21、2000 年 3 月）、浅田徹・五月女肇志「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（三）」（『調査研究報告』22、2001 年 3 月）、小川剛生・佐藤裕子「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（四）—附、古今集注釈書の奥書—『毘沙門堂本古今集注』関連を中心に」（『調査研究報告』23、2002 年 3 月）

6 『新古今和歌集』(92-5) 長享元年(1487)写 ^{かんろじちかなが}甘露寺親長(1424-1500)筆 2冊

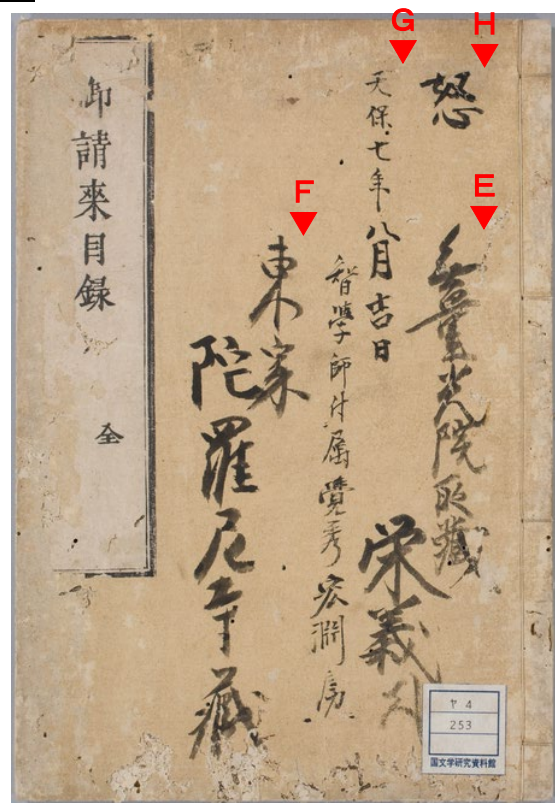




7 『愛染王法』 (ヤ 4-153) 1 帖



8 『御請来目録』 (ヤ 4-253) 1 冊



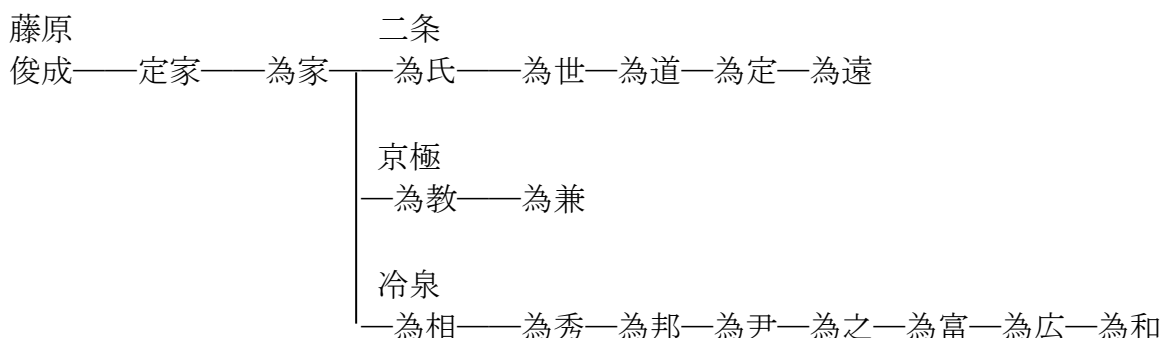
図版リスト

- 1 『古今和歌集』(99-2) 冷泉為和(1486-1549)筆・冷泉為広(1450-1526)加証奥書 2帖
<https://doi.org/10.20730/200003050>
 - 2 『古今和歌集』(99-4) 伝頼阿(1289-1372)筆 1帖 <https://doi.org/10.20730/200003052>
 - 3 『古今和歌集』(12-16) 初雁文庫(西下経一旧蔵書)〔江戸初期〕写 2帖
 貞応二年七月本 頼阿本奥書 永正十二年三条西実隆奥書 <https://doi.org/10.20730/200003205>
 - 4 『古今和歌集』(12-18) 初雁文庫(西下経一旧蔵書)〔江戸初期〕写 2帖 貞応二年七月本
 文明十四年本奥書「権中納言」は三条西実隆か(西下経一) <https://doi.org/10.20730/200003207>
 - 5 『古今和歌集』(12-20) 初雁文庫(西下経一旧蔵書) 正和元年日朗奥書 写 1帖
<https://doi.org/10.20730/200003209>
 - 6 新古今和歌集』(92-5) 懷風弄月文庫(後藤重郎旧蔵書) 長享元年(1487)写 2冊 甘露寺
 親長(1424-1500)筆 <https://doi.org/10.20730/200014094>
 - 7 『愛染王法』(ヤ 4-153) 粘葉装 1帖 ※表紙にD「信州 清祐之」の伝領識語あり。
<https://doi.org/10.20730/200008365>
 - 8 『御請来目録』(ヤ 4-253) 袋綴 1冊 正安4年慶賢開板。※表紙にE「無量光院所蔵栄義」
 F「東家／陀羅尼寺蔵」G「天保七年八月吉日／智学師付属覚秀宏淵房」H「怒」の伝領
 識語等あり。 <https://doi.org/10.20730/200012364>
- ※すべて国文学研究資料館所蔵。国書データベース (<https://kokusho.nijl.ac.jp/>) から画像を公開しています。

(2019～2023年版(海野圭介担当)、2017年度版(小山順子担当)を改訂)
 (『本 かたちと文化 古典籍・近代文献の見方・楽しみ方』所収
 海野圭介「写本—奥書・識語から本の来歴と素性を知る」を参照)

【付録】

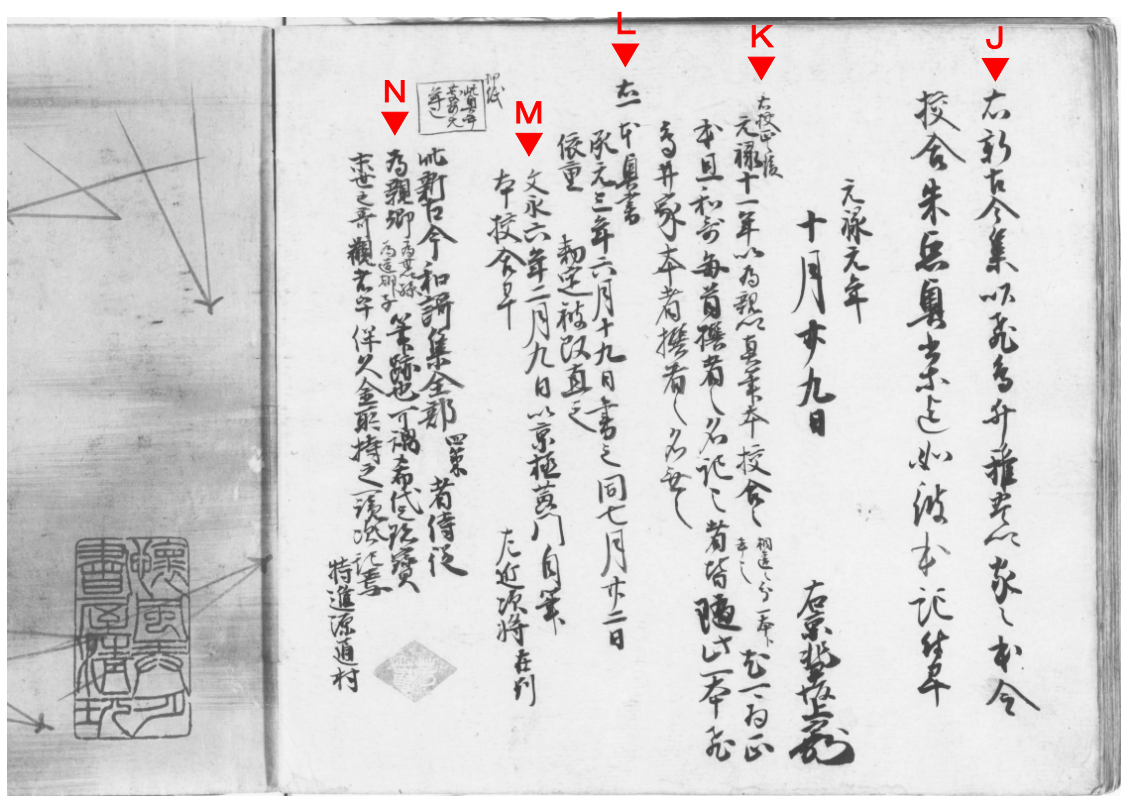
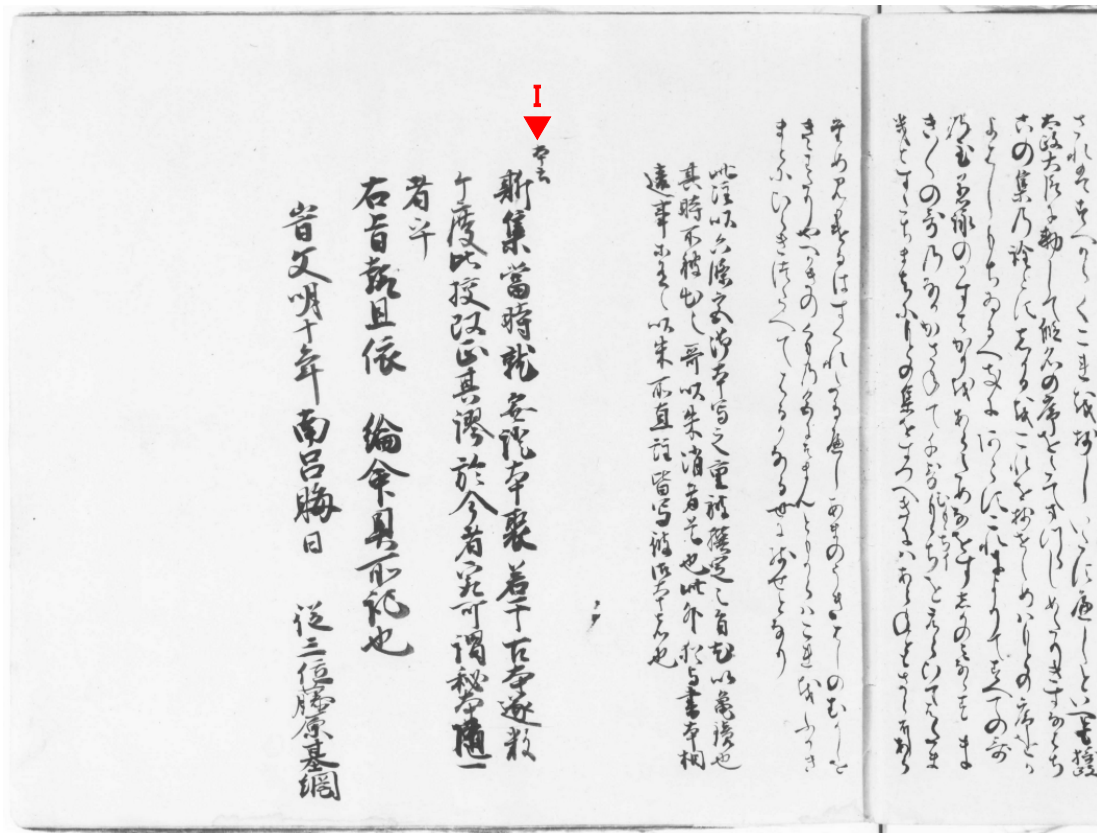
御子左家系図(横書き) 一は血縁関係 =は血縁にかぎらない師弟関係



二条派 相承図

為世 — = 頼阿 — 経賢 — 堯尋 — 堯孝 = 東常縁 = 宗祇 = 三条西実隆

事例研究『新古今和歌集』(92-42) 2 帖には多くの奥書・識語が記されます。それぞ
れどのような書写や校合等に関わることがらを伝えているのでしょうか？



事例研究解説 奥書・識語の表記方法の特徴について観察し、その伝えている内容について考えてみましょう。パズルを解いてゆくと同じように、何かの痕跡を見つけて、それぞれが何を伝えている情報なのかを判断してみましょう。

I：「本云」と右肩に小字で付記されていますので、「本奥書」（書写対象となったもとの本に記されていた奥書を転写したもの）と判断されます。奥書末尾の年紀によると、文明 10 年（1478）に姉小路基綱（1441-1504）が書写した本にもとづき転写した本がこの写本が基づいた親本（またはその可能性のある本。他に転写関係の本奥書が記されていなければ、これが当該写本のもとづいた親本であったと判断されます）であったことがわかります。

J：二行目に「校合朱点」の語が見えます。元禄元年（1688）年に校合し朱点を加えたことを伝えています。「以飛鳥井雅卿家之本」と記されていますので、校合の際に用いられた本は、飛鳥井雅豊（1664-1712）が所持した一本で、それと校合して朱点を写した（さらには奥書等迄も）ことがわかります。

K：「右校正之後」と右肩に小字で付記されています。一行目に「以為親卿真筆本校合」とありますので、先の例に加えてさらに「為親卿」が書写した本で校合したことを伝えています。この部分の下に割書で「相違之分一本ト書之」と記されていますので、相違している部分には「一本」の注記を加えて書き入れたことがわかります。一行目に「元禄十一年」（1698）と記されているので、**J**の後に 10 年を経てこの作業が行われたことがわかります（その他にも何がこの本によって書き加えられたのか、奥書の文面を読んでみて下さい）。

L・M：「右一本奥書」と右肩に小字で付記されていますので、「右」に記されている**K**の写本（為親卿真筆本）に記されていた奥書を転写した本奥書だと推測されます。この「右一本奥書」がどこまでの範囲のことを指すのかが判然としませんが、続く**L**が**M**に比べて一文字下げて書かれているのが気になります。**I・J**の例を見て見ても、奥書の文面に対して年紀は一文字から二文字程度下げて書かれています。このように記するのが通例ですので、**L**と**M**は一連のもので、「右一本奥書」のかかる範囲は**LM**にあたるとまずは考えてみます。

Mには「京極黄門自筆本」で校合したと記されているので、**L**はその本と関係するかもし

れません。「京極黄門」とは藤原定家（1162-1241）の通称。『新古今和歌集』の撰者の一人でもありました。やや専門的になりますが、『新日本古典文学大系 11 新古今和歌集』（岩波書店、1992 年）を見てみると、**M**と同じ文面の奥書が記されていて「藤原定家の奥書か」と注が付されています（同書 577 ページ）（注 1）。**M**の記載と辻褄があいいますので、**M**の筆者は「京極黄門自筆本」に記されていた**L**を転写したと考えられます。

Mの筆者は「左近次将」と署名されますが、これは誰でしょうか。**K**に「以為親卿真筆本」と記されていたので、為親という人でしょうか。和歌の歴史の中で著名な「為親」という人物を『和歌大辞典』（古典ライブラリー、2014 年）で探すと、二条為親（?-1341）という人物が出てきます（注 2）。生年は知られない人物ですが、**M**に記される「文永六年」（1269）の書写となると没年の 70 年以上前となり、やや不自然な感じがします。為親という人は二条家という歌道家を出自とする人物でしたから、その祖先の誰かが書写した際の奥書をそのまま転写していると考えるのがよいように思います。

この部分を整理すると、**L**は藤原定家によるもの、**M**は定家の子孫の二条家の誰かによるもの、**LM**ともに**K**に記される「(二条) 為親卿真筆本」に記されていた本奥書と考えるのがよいように思います。「(二条) 為親卿真筆本」はその祖先にあたる人々が記した**LM**の奥書を転記して伝えていたことになります。これらは、「(二条) 為親卿真筆本」が藤原定家→二条家某→二条為親と伝えられた藤原定家に遡る由緒ある写本の転写であることを記し、その価値の由来を伝えていると判断されます。あえて本奥書を書き記して伝えることにメリットがあったためにこれらが転記されたのでしょう。

（注 1）さらに詳しく調べるために、『新古今和歌集』の成立を論じた後藤重郎『新古今和歌集の基礎的研究』（塙書房、1969 年）を見てみると同じ文章が「藤原定家書写の明証のある」本の奥書として出てきます（同書 212 ページ）。

（注 2）後に記される**N**にも為親について「為世卿孫／為道卿子」とあり、**N**の筆者もこの人物を二条為親と考えていたことが知られます。

N：最後の**N**には「為親卿（為世卿孫／為道卿子）筆跡也」と記されていて、**K**～**M**に記されている為親筆本を実見した「特進源道村」がその筆者が為親であることを証明した加証奥書であることがわかります。「特進源道村」は、中院通村（1588-1653）で、桃山時代から江戸前期にかけて活躍した著名な歌人で学者です。この本が確かに為親筆であることを証拠立て

たかった「(二条) 為親卿真筆本」の所持者が通村に依頼してその本に書き加えてもらったのでしょう。これも **LM**と同様に「(二条) 為親卿真筆本」に記されていたと判断されます。

以上を整理すると以下のようになるでしょう。

＊ **I** にはこの写本のもとづく親本の情報が記される。

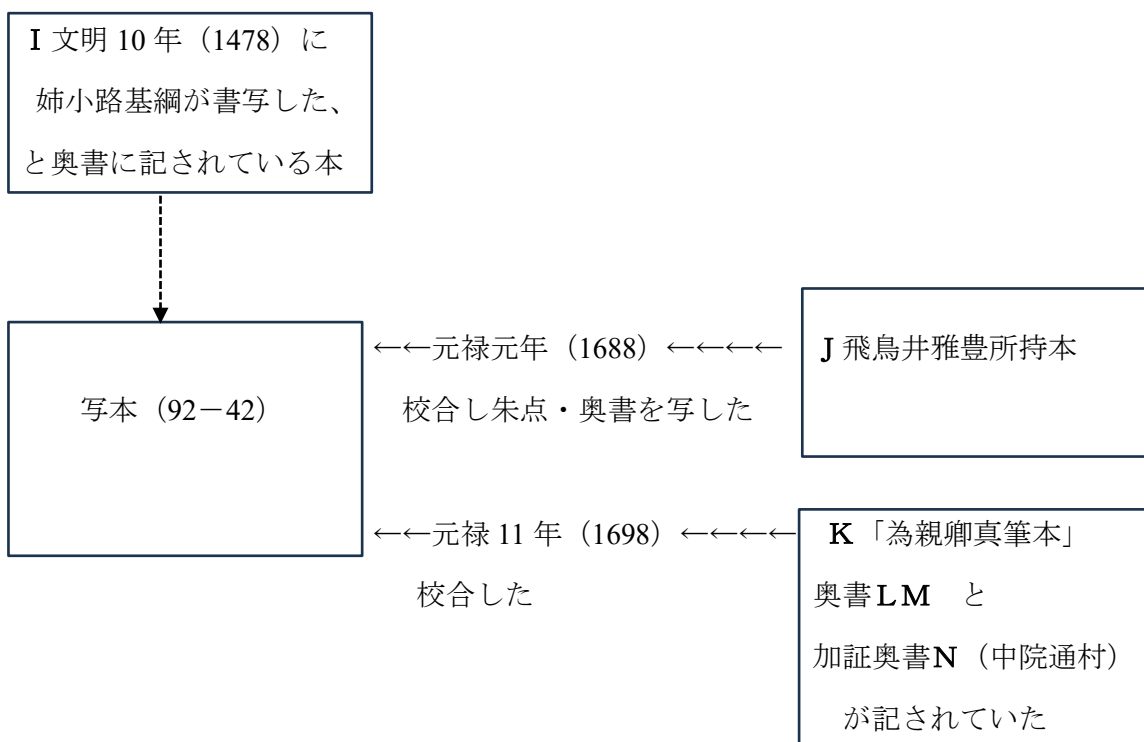
＊ **J** には、飛鳥井雅豊の所持した本で元禄元年（1688）年に校合が行われたことが記される。

＊ **K** には、**J** の校合の後、元禄 11 年（1698）に「(二条) 為親卿真筆本」で校合が行われたことが記される。

＊ **L・M** には、**K** に記される「(二条) 為親卿真筆本」に記されていた本奥書が転記されている。

＊ **N** には、「(二条) 為親卿真筆本」を見た人物の加証奥書（「(二条) 為親卿真筆本」に記載されていたと考えられる）が転記されている。

（親本）



奥書は、その書物がどのように伝わったのかを書き記して後世に伝えることに意義があると捉える意識のもとで記述されるのが通例です。意味が通じないように記すことは原則ありません。複雑に見える記載も、逐一見てゆくとその伝えたい内容が見えてきます。

図版『新古今和歌集』（92-42）懐風弄月文庫 <https://doi.org/10.20730/200014143>